

徒然なるままに…29

— 生活科授業づくりを生かす —



平成27年5月14日
白鳥小学校 研修部

ゴールデンウィークが終わったのも束の間、運動会をはじめ、目まぐるしい行事の中、慌ただしい日々が続いています。物事を整理しないと進めない私にとっては、いろいろなことが同時並行的に動いているようで、面食らいそうです。落ち着いて子どもと話したり、授業したりしたいものだと感じる今日この頃です。先生方、くれぐれもご自愛ください。

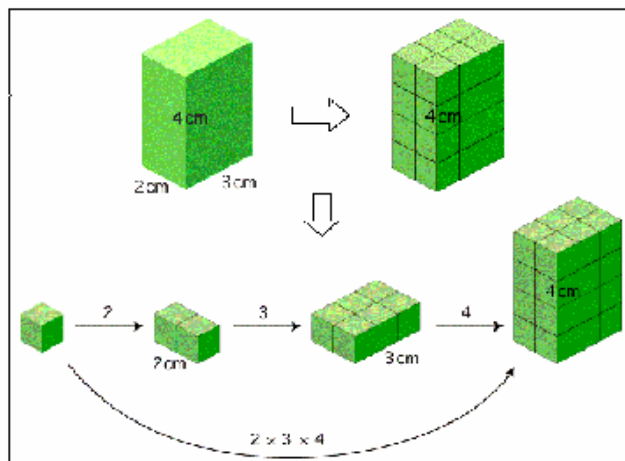
さて、先日は、広島大学大学院 朝倉淳先生に、生活科と社会科の接続、生活科の特性と授業構成、具体的な授業実践の工夫についてお話いただきました。朝倉先生は、実践家から研究者になられた先生なので、理論に裏打ちされた授業づくりのテクニックとたくさんの引き出しからのアイデア満載の分かりやすいお話でした。



今回は、朝倉先生の生活科授業づくりから、他の授業づくりや活動展開に生かせる内容についてまとめてみたいと思います。

1点目は、体験的に学ぶことです。「体験的な活動を通して…」が生活科の決まり文句というくらいに、よく使われます。これは、言い換えれば、見て・して・出会って分かるということです。

先日、算数の時間にこんなことがありました。直方体の体積の公式化の学習でした。前時に [資料1] のように、1つの立方体の数でかさ(=体積)を数値化することを学習しました。それを踏まえて、1つのブロックがたてに2こ、それがよこに3列、それが上に4段あることから、体積=たて×よこ×高さで求めることができることを見つけるのが本時でした。



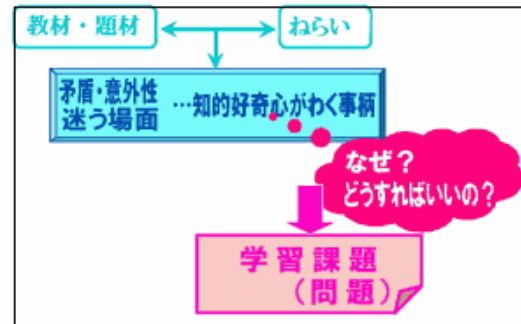
[資料1：直方体の体積の公式]

しかし、何人かの子どもが前時に体積を求めることができたにもかかわらず、本時では、まったく学習が進みません。そこで、実際に、1つのブロックを積み重ねて、直方体に1つごとの線を入れさせました。[資料1]のように、まず、たてに2こ並べて、それを3列作り、その上に4段積んでいくという活動のプロセスを通して、1つを単位としたこの直方体の構造に気付くことができたと考えられます。資料やワークシートを提示して、子どもに分かりやすく支援しようとするのがよくあります。しかし、逆に、自分で描いたり、つくったり、操作したりする体験から分かる・気付くことを促すこと

も大切だと思います。当たり前のことのようにですが、あえて、再確認したいと思います。

社会科で考えられる体験的な活動には、見学・調査活動や具体的な資料を基に行う調べ活動、古代体験などの体験の他に、白地図づくりがあります。白地図は、時間がかかる上に、指導が難しいので、わりとおっくうがれます。しかし、空間的な位置付けや地理的なつくりの傾向を、体感的につかむには、有効な活動です。例えば、日本の地形の特色を見つけるために、山・川・平野に着目して白地図をつくると、子どもは、色を塗りながら山地・山脈が陸地の中心に背骨のように通っていることや山・川・平野がセットで分布していること、関東平野など、平野が広い地域は、川が長く、西日本などの狭い地域は、平野が点在していて、川は、短いなど、日本の地形の特徴と、そのわけを考える手掛かりをつかむことができます。ぜひ、取り入れてみてください。

二点目は、主体的な学びを展開することです。主体的な学びの源は、子どもの「学びの必然性」です。なぜ、この活動をするのか、何のために調べ、考えるのかというねらい・動機を子どもが自覚していることです。授業づくりにおいて学びの必然性を生むのは、「問い」の設定です。「なぜ。」「どうすればいいのか。」と、子どもに感じさせ、問いを持たせれば、子どもは、切実性を持って、主体的に追究しようとするのです。〔資料2〕



[資料2：問いの設定]

問いの設定には、大きく二つのケースが考えられるでしょう。



一つは、矛盾・意外性のある事柄を示すことです。例えば、社会科の米づくりの学習の導入において、日本で米の生産が盛んな地域は、東北地方であることと、米は、亜熱帯の植物であることの矛盾した事実を示した上で、「米は、暖かい地方の植物なのに、なぜ、日本では、北の東北地方で米づくりが盛んなのだろうか。」という問いを設定することが考えられます。

もう一つは、問題場面の設定です。例えば、算数の平行四辺形のかき方の学習において、「かき方を考えよう。」とめあてを設定するよりも、「平行四辺形の四つ目の点を見つけるためには、どうすればよいか。」と問い掛ける方が追究する動機付けが得られると考えられます。

社会科に限らず、どんな授業においても、主体的な探究を展開するためには、まず、問いの設定からスタートし、それを探究・解決していくために必要な流れをストーリーとして描いて授業にしていけることが必要だと考えます。

授業ばかりでなく、どんな活動・取組も、子どもの学びの必然性が必要だと思います。行事だから、しなくてはならないからとして、一方的に子どもに下ろしたり、教師主導ですべてを決め、子どもをレールに乗せてしまったりしては、子どもの主体的な活動・取組にはならず、ある意味、先生たちのための取組になってしまうことは、否めないのではないのでしょうか。

問いの設定は、本校の授業論の特徴の一つで、これまで大切にしてきたことです。詳しくは、本年度の研究推進計画をご覧ください。

24日から、いよいよ授業づくりの提案が始まります。教材の目新しさ以上に、この授業で、何がしたいのか、どんなことに気付かせ、感じさせ、伝えたいのかという授業のビジョンをはっきりと持って、教材構成してみてください。いつも言いますが、先生方お一人ずつの持ち味を生かしながら、新たな「挑戦」をしていきましょう。

